

ウイルスを分離、H抗原はHsw1と命名された。1990年代になってアラスカの永久凍土に眠るスペインかぜの犠牲者の遺体からもHsw1N1が分離された。

b. 1934年 プエルトリコかぜ：A(H0N1)

c. 1947年 イタリアかぜ：A(H1N1)

1947年春、南部イタリア、シシリー島、サルジニア島でごく小規模なインフルエンザの流行があった。この流行で分離されたウイルスはA(H1N1)と名づけられた。A(H1N1)は1948年11月にシシリー、イタリアで流行、流行のピークは1949年1月であった。1948年12月から1949年2月にかけて流行はヨーロッパ一帯に拡大した。1949～1950年のインフルエンザの季節にはイギリスとスカンジナビア半島で流行した。

d. 1957年 アジアかぜ：A(H2N2)

1957年2月中国貴州、雲南地域で新型インフルエンザが登場した。3月には上海、次いで香港、シンガポールで新型インフルエンザが発生し、ウイルスが分離同定されA/アジア/57(H2N2)と名付けられた。

横須賀基地のアメリカ海軍は香港との間に頻繁な交流があった。1957年3月終り頃この基地周辺から神奈川県下の特定の地域にかけてインフルエンザ患者が多発していたという噂があった。確実な流行の始まりは、4月10日の東京都世田谷区深沢小学校における流行であった。日本とインドは5～6月にA/アジア/57(H2N2)の流行の第一波に見舞われた。アメリカ、ヨーロッパでは夏が過ぎてインフルエンザの季節になって大流行に発展した。

e. 1968年 香港かぜ：A(H3N2)

1968年7月初旬に香港でインフルエンザの流行が始まった。イスラエル貨物船が7月18日に香港に寄港した後7月24日に名古屋港に入港した。船の乗員42名中15名がインフルエンザ症状を呈しており、インフルエンザと診断された。15名のうち12名からうがい液を採取、ウイルス分離同定を行ったところ、国立予防衛生研究所の福見秀雄博士が香港から持ち帰った8株と同じウイルスであり、従来の流行株とは著しく抗原構造の異なる株であった。これが、わが国への香港かぜの最初の侵入であった。わが国における香港かぜの流行は10月になって拡大した。

最初の香港かぜ流行学校は東京両国中学校であった。香港かぜ流行の極期は1969年1～2月であった。流行は同年4月をもって終焉した⁸⁾。

f. 1976年 フォートディックス事件：A/NJ/8x53/76(Hsw1N1)

アメリカ フォート・ディックスの新兵訓練所で新兵が死亡し、遺体の気道からA(Hsw1N1)が分離された。それ以外の4例からもA(Hsw1N1)が分離された。さらに別の6例が血清学的に診断された。新兵訓練隊12,000人のうち500人がA(Hsw1N1)に感染したことがペア血清抗体測定により証明された。フォード大統領は秋に全アメリカ人にワクチンで予防接種を行うことを目的として1億3,500万ドル(約400億円)のワクチンを製造する法案に署名した。接種が始まって間もなく、副反応の問題が浮上した。通常のコラン・バレー症候群の発生頻度は1～2/100万であるが、ワクチン接種を受けた者では、1/10万の頻度で発生することが問題になった。そのため、ワクチンが全人口の4分の1に届いたところで挫折した。連邦政府は損害賠償金9,300万ドル(約260億円)を支払い、フォード大統領は辞任に追い込まれた。

g. 1977年 ソ連かぜ：A(H1N1)

1977年5月頃中国北東部の渤海湾、黄海に面した地域、とくに安山、安東、天津地区で季節外れのA/H1N1インフルエンザ流行があった。同年11月にソ連における最初の流行が認められた。シベリア東海岸、ナホトカ、ウラジオストク、ハバロフスク、モスクワ、モスクワ西南方のポルタバ、シベリアのノボシビルスクで殆ど同時に流行した。同年12月には香港で流行し、次いでマニラ、台湾で流行した。根路銘は、Aソ連型ウイルスA/USSR/92/77のフィンガープリント像はイタリアかぜウイルスのものであったと報告している⁹⁾。

4. 2009年 インフルエンザA(H1N1)2009：A(Hsw1N1)

a. 2009年4月27日 WHOによるインフルエンザパンデミック警戒レベル フェーズ4 声明
2009年4月27日、WHOはA(H1N1)豚インフルエンザに対してインフルエンザパンデミック警戒レベルフェーズ4 声明を発表した。以下